

けた土産に何〜貰つた。一にや、小箱、二にやまた手箱、三にやさし櫛、しのべの枕。五ばん簪、六ばん前垂、しめて七ばん、さやの帯、絨子の帯、先づ〜一かん貸せ申した」

六、ひめさん、とよさん、ひめさまへから、御手紙、参つたとして、何といつて参つたとして、今日、今晚、御日待やらうと向ふ見れば、白壁ずくしの、若い暖簾が、かゝつた〜私ら佐野屋の絹絲少女のおみね様にお渡し申しましたよ」

七、今日も、よき日だ明日も好き日だ私らが隣の惠比須講によばれて、行つたら、紅鯛の吸物、蒔繪の御膳で、柳の籠箸で、一杯吸はしよ、二杯吸はしよ。三杯目には、溢れて、こぼれて、御寺のდანから、お鼻〜鼻づかみ、ねびん〜びてなで、ねたげ〜

み、ねかねを附けまじよ、お紅を附けまじよ。御白粉を附けまじよ、先づ〜一かん貸せ申した」

八、ざくろ〜、つかみざくろ、ねしやく〜としめて、よをしめて、花は千咲く實は一つ毎朝〜手をたゝき、じ〜ん〜地拂ひや此の地を拂つて一匁」



九月の天地

まか生

昨日まで早苗どりしが何時の間に庭の芭蕉のね

ののきて、秋風の朝な夕なに身にし行頃となりぬ。

山中暦日なしとかや草深き山の奥ほど長閑なるものはなし。夙に起き柴の戸を出づれば、白露團々人の袂を霑ほし、風には、笑む萩、尾花、葛花、撫子、女郎花、桔梗、刈薺、藤袴、野菊、千屈菜、茅嫂根、蓼に鶏冠、五味草。

苔の細道踏みわけ入れば、深く潜める野鳩の幽暗き聲の洩れ來り、重陽の節句に菊未だ開かざれど秋菜黄やうく熟す。

麓の畑の路つたひ、小さき黒き眼をば熟せる粟の垂れし穂に注ぎて思案小首の鶉をば、驚さむも氣の毒とソロッと迂迴して溪の磧に轉ずれば、岩の上なる鶺鴒は聲朗かに波形に飛ぶ。

流に沿へる對岸の榛の梢に百舌鳥來り鳴き、山

噛み躍り跳ね廻り暴れにわれにし深水も岩間の淵に淀みては、中に游げる鱒をも數へ得べし。

松蟲、鈴蟲は露に鳴き、夜寒に秋のなるまゝに檻樓させどや蟋蟀の弱るか聲の遠り行く。

秋分の頃、燕は盡く南に歸り、鴻雁未だ來らず、風を切つて蜻蛉縦横に飛び蚊軍爲めに形勢日に衰ふ。

稻田萬頃金波洋々たる平野の間なる流をば、白帆斜にユルくどうねりて下る川舟に、騒くは蘆間の鳴か鷓か、沙魚、鰯など鮫に躍る。

浦の渚に白鷗の翔ける、磯の小島に鶉のやすむ、濱の漁夫の漕ぐ釣舟、海藻抱いてうれしげに家路に向ふ乙女子、竿を肩にし籠さげて歸る夕の漁翁、漁火滅えつ明りて遠寺の鐘の響幽なるに疑乃

の聲。

月つき月に月つき見る月つきは多おほかれど月つき見る月つきはこの月つきの月つきいざや月つき見みん、月つき見みれば千ち々に物ものこそをかしけれ、我われ身み一つの秋あきにあらねば、げに月つきは我われ等らに對たいして平びやう等とう無む差さ別べつなり、一いつ視し同どう仁になり。

山やまの端はの月つきよるし、平へい原げんの月つきよるし、海かい邊へんの月つき可かなり、林りん間かんの月つき可かなり、高たか嶺ねの月つき、中ちゆう天てんの月つき、雲うん間かんの月つき、雨う後ごの月つき、海かい上じやうの月つき、湖こ畔はんの月つき、しめりりがちな有あり明めいの月つき、少すこしも見みえぬ新しん月げつ、鎌かまの如ごとき三さん日にち月つき鏡かみの如ごとき望もち月つき、水すい蒸じゆう氣きの爲ために朧ろく月つきとなり、晴はれては千せん里り一いつ望ぼう仲ちゆう秋しゆうの満まん月げつとなり、見みる人ひとの心こころに任まかせられて長ながへに清せい涼りやうの感かん想さうを起おこさしむ。
秋あきどしいへば、棒ぼうの轉ころがりたるにも弱よわ音ねを吐はくは唐たう人じんの得ぞう意いとする處ところなりき、今いまの日にち本ほん國こく民みんは骨ほねと皮かわにて造つくり泣な言ごんをいふ爲ために現あられ出いたるものに非あらず、石いしにて造つくり唯ただ名な利りを貪むさぶる爲ためにのみ生うまれ來きり

しものにも非あらず、我われ等ら日にち本ほん國こく民みんは剛がう毅ぎ宕たう落らく堅けん忍にん不ふ拔はつ勇ゆう往わう敢かん爲るの國こく民みんたると同どう時じに物もののあはれを解かいする健けん全ぜんなる國こく民みんなり、又またならざるべからず、

聲こゑかれて猿さるの齒は白しろし峰みねの月つき

瀛しやう車じや旅りょ行こうと道みち連づれの幼よう兒に

ひ さ 子

皆みな様さまはいかゞですか。私わたくしは汽き車じや旅りょ行こうが大だい好こうで、あわてゝ送おくり迎むかふる山やまや、川かはや、海うみや、家いえや、人ひとや、電でん信しん柱ちゆうや、畑はたけや、スステスースシシヨヨンンに逢あひますと、誠まことに心こころ持もちがよく、まして列れつ車じや中ちゆうには、種しゆ々じやく様さま々々の人ひとが乗のりり込こんで、いろ／＼の話はなしをして居ゐりますから、これを見み聞きするののもたしかに一いつの樂たのしみなので、只ただ一いつの機き關かん車じやが、一いつ社しゃ會かいどころではないいろんな社しゃ會かいの人ひとをひつばつて走はしる、と思おもへば文ぶん明めいの

利器といふものは、誠に便利で、そうしてれもし
 るいものと思ひます。併し瀟車に乗る人皆が皆
 私のやうな氣樂な考を持つては居りませ
 い。或は急用をかへて氣が氣でない人、親の危
 篤とさいて心も空に瀟車の走るのもれそいどかこ
 つ人、又は久しぶりで國に歸らうといふので活氣
 と喜にみちた人、電信柱のいかにも急いで後に
 走るのをよろこぶ幼兒、まはりの景色のつけさ
 せに變化するのが只れもしろい幼兒などもありま
 せう。つまり乗つて居る人の心は實にいろ／＼で
 ありませう。すると瀟車はいろ／＼の人いろ／＼
 の思を載せて走る車です。
 私は此夏休に新橋から東海道を瀟車で走りま
 した。そうして一人のかわい、小道運を得まし
 て、其御蔭で一層愉快に旅行をいたしました。

まづ程ヶ谷から一人の四十才位の洋服を着た日
 本婦人が、其子らしい七八才の女兒を連れて私
 の居る列車に乗り込みました。阿母さんは英語ま
 じりに其子と話をして居ります。私は幼兒が大好
 ですから、どうか此兒が傍に來ればよい、と思
 居りますと丁度私が窓際に居つたのですか
 ら、此兒は度々チヨロ／＼と私の傍に來ては窓
 の外をのぞきます。そこで私は持つて居りまし
 た雑誌を出して「此畫を見せて上ませう」と申し
 ましたところが、其兒は無邪氣に寄りそうて來ま
 した。これで私は此兒と親しくなりました。
 〳〵の話を書きました。

此女兒は今年八才で、父母の布哇のホノル、に
 出稼中に生れ、父は昨年ホノル、で亡くなり、母
 と二人で昨日横濱に着き、これから郷里の山口縣

に歸るといふ話です。ですから此兒は日本人では
ありませんが、生れも育ちも布哇で今度はじめて日
本の地を踏んだのであります。

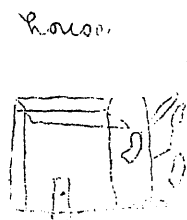
此兒は私の間に對して極快活に、そうして年
齡の割合に、たしかに話をいたしました。

ホノル、に居る間は、午前は西洋人の學校に行
き、午後は日本人の學校に行つたそうで、日本語
も英語もよく知つて居ります。簡短な問を日本語
で出しまして、「英語で返辭をして頂戴」と申しま
すど、流暢な辨で正しく返辭をいたします。大人
の私大にはづかしく感じました。今度は私が
紙と鉛筆を出しまして「何かかいて頂戴」と申し
ましたところが、下にあるやうなものをかいてく
れました。

此書はホノル、に居つた時の此兒の家で、家の

下の方に何かぶらさがつたやうなのは階段、其上
に長四角なのは戸、黒いポッチはとりて、家の右
にあるのは木だそうです。

次に私は突然あなたはこの國の人ですか
と問ひましたらば、「私は日本人」ときつぱり答
へました。それから私は「日本と布哇とどつち
がいののです
か」「どつちが
賑ですか」「ど
つちがすきです
か」「どつちがよ
いのでせう」など、日本と布哇を比較した問を
出しますと、此兒は一も二もなく「日本の方がい
い」「日本が賑です」「日本がすきです」「日本の方が
よい」と答へます。何でもかでも、日本をよい



house.
cook
mangoes
apple
mother
father
girl.

(寫 縮)

方に言ふのです。此兒は生れてから、やつと昨日はじめて日本に來たのに、日本を最負すること此通りです。之は全く常に父母が家庭で日本々々といふものですから、まだ見ないさきから自然に愛國心がしみこんで居るものと見えます。

私ほもつと、此兒と話し、進で阿母さんにもきいて、内地で育つた兒と、外國で育つた兒とどんなにちがふか、布哇の家庭の有様はどうであるか、知りたくございせしが、やみがたい要事の爲に私は東海道の或驛で下車しましたから、残念ながら此かわい、道連と打角御なじみになつてから、三時間許でをし別を告げました。あ、此兒今は何をして遊んで居るでせう。

名月や取つてくれると泣く子かな

女監を觀る

澤 生

南して幼年監に至り（茲には省く）參觀終りて炊事場を視る、四間に五間ばかりの場内に、三個の大鍋の中なる引割の半麥飯よりユラ／＼とさし昇る蒸氣の加減を見まもりつゝ薪もちたる二人、一方に幼囚、男囚、女囚、外役囚、にとそれ／＼の分量にはかりさりて小桶に飯を入るゝもの三人、冬葱の味噌壺を丸き曲物に挿み入るゝ者、患者の爲にとて牛肉のタタキの梅干大のもの三個宛を器に配分するもの、片隅にて餘念なく澤庵を切り居る者など、總て十數人の男囚徒等は四人の看守の指圖にて働き居たり、例の看守長は一々此等の説明をなしくれて終りに澤庵一ト切をとり上

げ指して其美味を誇られたりき、獄内衛生上の注意の至りて行届きたるは見るにつけ聞くにつけてかへすくも豫想の外なりき、炊事場の北の戸外には二人して井戸より水汲ぐものあり、又其傍なる室にて車を轉じて麥を引割るもの二人あり、皆終日殆んど休むをなく立働きたつゝあるなりと聞く、看守長の話にては、此處に使役する男囚は逃走の虞なき至つて従順なる者のみなりとのとなりしかども尙女囚に比ぶれば何處どなく活氣ありて無邪氣なるやうに思はれたり、されどわれには絶えず一種言ふべからざる感慨の胸中に蟠まるありて廣き境内を狭く薄暗さ心地しながら炊事場の參觀亦終る、時に午後三時半なり、乃ち第二の門を出で、再び樓上の應接所に歸りぬ。

先刻の典獄再び出で來りて、學校長と犯罪と教

育との關係につきて談話せらる、われは當時既に瞑想の淵に沈みて閉ぢたる我眼に歴然として再現し來るものは監房内の凡ての光景なり、笑ひて築きし長堤は何時しか崩れてあはれ堰き止めたりし紅涙は今や一瀉千里の勢を以て溢れ來りぬ、曰く「罪は故殺謀殺放火強盜竊盜なり人は豈人にあらざらむや」と、之を要するに良心の感應鈍くして因つて以て大膽不敵の行爲に出でたる精神病患者の外は、大抵邪慳深く思慮に短にして先見に乏しく、劣等の感情に激せられ易くして意志の薄弱なる等の原因により其畢生を誤り此悲惨の境遇に陥りたる者共なり、されば彼等も人としては人なり、豈盡く彼の毎朝の裸体の門越を以て面白しとす者のみならむや。罪なき我兒を罪人の住居に産みて其兒に終生不滅の汚名を與へたるは彼

等と雖何ぞ之を以て此上なき愉快なりとなすもの
 のあらむや。病み細りて此世からなる餓鬼かどま
 がふ四十五六の女が線金の如き指もて糸つなぎ居
 たる、果敢なき命は風前の燈火の如し、彼何ぞ自
 ら糞ひて此處に居るをななさむや。誰か好まむや
 二十前後の弱齡を以て一朝の燃ゆるが如き心の煽
 に煽がれし過より紅衣細帯して終日機にかよびか
 りて極めて乾燥無味なる機械的の勞動に嚴重な
 一定の制限を屏へられて傍目もふられす苦まひ
 とを、彼は果して將來に何の希望を有するか靜に
 思やるべし無期徒刑の四字を。わきて六十路を越
 ゆる三つ四つなるが世にあからさまに立つならば
 可愛の孫の莖菜蒲紫英を左手になして右手は菜の
 葉にとまれる黄蝶を追ふをまもりて樂むべし其老
 の眼をこすりもて此處に縋繰くり居たる、あはれ

其めぐる紡車の無常の風は何時か此老女の身の
 上に吹かざらむや、彼何ぞ喜んで此處に居るもの
 ならむや。

さるに彼等は揃ひもそろひて一生懸命に働さく
 らせり、われはいたく怪みぬ、彼等が將來に些少
 の希望もなくして此乾燥無味なる勞動に欺くまで
 に熱中するとの何故なるかを。彼等は果して何と
 も感ぜざるか思はざるか、否、否、感ぜざるに非
 ず思はざるに非ず、唯感じて思ふども何の益なけ
 れば……益なき憂き思せむよりは寧ろ夢中に働さ
 て其日その日を成るべく幻のやうに消費せむとす
 る憐むべき念慮に支配せられて居るなり、切言す
 れば彼等の無我夢中になりて忙はしく働くは只管
 墓に向ひて近づくかむとあせるものなり。

彼等既に此心を以て毎朝彼の工場の如來に對す

豈多少の得道せざらむや、發心せざらむや。

試に問ふ、蟲聲唧々として鼓膜にきり入り何處の落葉にやハラ〜と窓外にひとひ來る秋の夕暮に日中の劇しき勞働に疲れて茫然たる時、朔風戸隙を衝きて侵入し紙の如き一片の蒲團に鐵窓を射來る寒けき月影を止むる夜半に暖ならぬ床の夢醒めし時などには、彼等は果して刃を人に加ふる心あるか、毒を人にあふがしむる心あるか。怒つて放火する心萌すか、強いて掠奪する心起るか。嗚呼何ぞ夫れ然らむや、かるが故にわれは其罪を惡みて而して其人の爲に悲しむ。

若夫れ再犯三犯八犯九犯十四犯十六犯して監房内に此辛酸を嘗めて尙且つ改心するを能はざる精神病患者に至りては更に惻隱の心に堪へざるものあり、彼等は等しく人に生れながら何故に斯く

までも邪欲の惡魔にからまれて以て人らしき人として穩かなる生を享くるを得ざるかを思へば惻まざらむと欲すとも惻まざるを得ざるなり。況んや彼等の多數は先天的に斯かる悲むべき精神病患者なるに非ずして殆んど凡ては此先天的なる些少の萌芽を不幸なる境遇、殘酷なる社會の狀態が助け長じたるものにて所謂智なり情なり意なりの闕典によりて漸次に此惡性なる慢性病を馴致したるものなるに於てをや、更に聞かずや彼等八十九名の中に辛うじて己が姓名をだに書くを得るもの僅に四名にのぼらざると、われは強ち文字上の識不識によりて直ちに教育の有無を測定せむとするものに非ず、又教育は必ずしも犯罪を減ずと唱ふるものに非ず、されども眞の教育らしき教育の全く彼等になかりしとは其犯罪の大原因なりしと

を確認して疑はざるものなり。

近來女子教育の氣運再び勃興し全國到る處に私の高等女學校の續々として設立せらるゝものあるを見、都下には又更に各種の女子専門學校の設立の計畫あるを聞き、殊に女子大學の設立を見るに至れるとはわれ等の誠に慶賀する處なれども、實際彼高等女學校女子高等専門學校女子大學等は是唯社會の上流に立つ一部の人の爲のみに非ざるか、眼を轉じて廣く一般下流の最多數の婦女子に至りては果して如何、彼等は普通教育の門戸にだに窺ふ能はざるに非ずや、徐ろに社會の光明なる表面と暗黒なる裏面とを觀察せむか、誠に多言するに忍びざるものあり、同胞四千有餘萬あり、確かに二千有餘萬の女性あり而して最下流の憐むべく悼むべき女性決して少なきに非ざるなり。

既往に鑑み、將來を推せば、今の社會には經世の熱血、救民の紅涙、とは唯文字の上の事ならじ。

われは今更に此限りなき感慨を惹き起し、監獄を訪ひしを悔み、一行が對談終りて典獄及兩看守長に謝して各自應接所を退き始めたるにはなかくにうれしき心地ぞせられし、辭して出づれば中庭の柳條微風にもつれて一株の山櫻今將さに綻びむとせり、感慨ますく極りなし、黒門を出で遂に歸れり、時方に午後五時なりき。

(完)

此參觀の後年餘、われは旅の空にて聞きぬ、彼熱誠なる典獄は不慮の災にかゝり突然歿せられしと、こゝに又二年故人を追想して一層憤懣の感に堪へざるものあるなり、

(辛丑の秋附記す)

印度土人の家庭生活 (承前)

Y I.

で、印度に於きましては毎年社會改良に關す

る大會がひらかれました、小兒寡婦の逆境に付
 き種々協議されるのでありますが、唯だ少ばかり
 の改良された家庭では小兒寡婦の境遇が餘程まし
 になつて居ますだけで、改良進歩の意見に感化せ
 られた者は誠に小數でござります。そこで婦人が
 教育せられるようにならなくては、眞誠の社會改
 良とか進歩とかいふことは、到底行れないとい
 ふことは誰にでも明白に分つて居るのでございま
 す。

印度の家庭では婦人が大なる勢力を持てゐます
 ことは、前に御話しいたしました事から御分り
 でしょうが、印度の婦人達は年齢と經驗とを積むに
 従がひ随分尊敬すべき品性を暢發いたしましたして、
 たゞに優た訓練家となるばかりでなく、屢々熟練
 な實際の事務家となり得ます。所がこの婦人達は讀

み書きすることは男子の仕事であると見做して、
 自分らは少しも之をなさないので立派に生活して居
 ます故に若し一家内の男子が女兒にも讀み書きす
 ることを、教へなければならぬなど云ひ出しま
 すと、婦人達は夫れを以てほんどうに耻づべき事
 だと思はないまでも、大低は馬鹿げた冗談として
 嘲笑つて居ります。一家の婦人達がかゝる態度を
 取て居ますうちは、男子は所詮如何とも致しかた
 がないのでござります。

併しなから、幸なことに諸所に於て改良事業
 が熱心不撓の精神を以て、奮勵せられて居ます、
 私の郷里なるブーナの町の印度國民協會では、
 十年程と前に二三の改良されたる家庭に於て、學
 塾を開きまして其學課目は國語の讀み方、文典、
 作文、算術、家政簿記に關する暗算、歴史、地理

英語、梵語、及び衛生大意などでありまして、ブ
ーナ町の委員が毎年一度試験をいたしまして、凡
ての家庭の學生に證書と賞品とを與へることにな
つて居ます。

最初の家庭學塾は十三名の婦人を以て始めまし
たが、他に多くの熱心な志願者がありまして又同
町の他所にも開く様な事になつたのでありまし
たが、この塾に參ります婦人達は悉皆結婚した
る婦人或は寡婦でございまして、多數のものは子
供があり又た家政の務のある婦人達ですから、好
し印度從來の妄説が十二歳以上の女兒に學校に行
くことを禁じないといたしまして、此婦人達は
到底普通の學校に通ふことの出来ない人をなので
ございす。

この家庭學塾がよく整頓いたしてから、まだわ

づか二三年しか經ちませんけれども、眞正の需要
に適合いたしたやうで、將來確かに増加する望が
ございす。此學塾に參りますもの、外に又各
自分の家庭で獨學して居るものもありますが、
斯ういふ人達はいづれ多くの教授をうけることが
出来ませんから大變な損であります、夫れに又試
験の時期が近づきますと、全學課はどても一度に
準備いたすことは出来させんけれども、勉學しま
した丈の學課に付て試験をうけることを志願いた
します。夫でかように自宅でも熱心に勉勵する
よるな人々は、出来る丈獎勵して行くことは好ま
しいことですから、此志願は許可されます。この
試験は學生を責め苦しめるのでなくつて、反つて
大層樂しませて居るやうに見えます。或るとき試
験の終りに當つて殆んど一番に試験をなしをへた

一人の年若き婦人は、まだ自分はほんの小兒らしく見えて居りましたが、前に進み出て「來年も亦尙はいちすこし進んだ學課を學ばせて下さい」と願ひ出ました、で、なぜなほ進んで學びたいのかと尋ねられましたとき、この婦人は「私の男兒がいま成長して學校に行くやうになつたときの助となる爲めに」と答へました。又他の婦人らは保育看護のことを習ふため、尙ほ他のものは今よりもつとましな良人の内助とならんために學問して居るのでございます。かゝる感情が源動力となつてこの婦人達をして家政上の思慮と妨障とがあるにも係らず、熱心に不撓に勉學せさせたのであります、が、二三年前から種々悲しむべき災禍が引續きました爲めに、我々の大に進歩せしめんとして居た計畫は、不幸にも非常な妨を受けました、

併しながら又々よい時節の來ることを望んで居ります。そこで我々が前途大に望んで居ることは、この印度國民協會のブーナ支部會が大に奮發して十分に盡力いたし、この學塾をしてだんく増加させ擴張させて、印度の風習が大に改革せられない限りは、いつまでも無學不文に終らなければならぬ幾千萬の婦人達に、簡單にして、しかも實用的な智識を興へる方便となしたいのでございませう。

印度に於ける女子教育は、印度人の親切で忍耐ふかくつて快活である天性をば、反つて不正に反射して居る家庭生活の不愉快な方面を、改良するに至ることは無論確實であるといたしても、爰に又今一つの難問があります、このことは印度にのみ居る改革家の氣付ないこととして、我々が英國

にきて、皆さんの家庭生活の情態を拜見いたさな
 いうちは、少しも心付かないのです、これは我々
 印度人は極幼少の時を除くは男女相離別する風習
 のあるために、どれほどの幸福を失ふかといふこ
 とでございます。英國のように凡ての家庭に於て
 一般に食事のとき又はその後には男女が相會するど
 いふことは、印度では出来ないのです、いつも男
 子と男兒とは一方に婦人と女兒とは他方にチャ
 ンと相離れて居るのですから

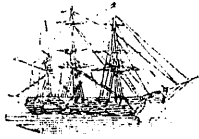
印度の青年男子が英國に参りまして數年を過す
 うちには、英國の社會と家庭とに親しく接しまし
 て、高等教育をうけた婦人達とも屢々會合するに
 從ひ兄弟姊妹從弟妹かよび凡ての青年男女は、ど
 れほど善い友人となることが出来るかといふこと
 を自覺するのでございます、それからして愛する

人々の待ちわびて居る印度の家庭に歸つて見ます
 と、どうでしょう、此方では不幸なる妄説の行は
 れて居るために家族も社會も丸つきり男女といふ
 二つの群衆に別れて居るのです、斯ういふ風です
 から、その毎日の生活に於て男女が互に全体の幸
 福を計らふと思つて自分の出來得る才力を盡して
 初めて成り立つ所のいふにはれない快樂興味と
 いふものは、全く奪はれてしまうのでございま
 す。

終りに望んで別して皆さんに御願ひ申したいこ
 とは、皆さんがどうか、印度に於てなほ進んで教
 育を受けることを望んで居る婦人らと又社會の風
 俗改良のため、御同情を表していただきたい
 ことでございます、英國からの御同情といへば印
 度では大層有りがたがつて受けるのであります

が、若しそれが實用になる書物だとか學校道具だとか常品又は贈物などでございませうならば尙更のことで、皆さんはこの遷化の時期に於ける我々印度人の事業を、最も歡待すべき方法でもつて助力して下さることになるのです。斯様にして我々の計畫を御心に懸けて御同情なして下さることは、とりもなほさず、我々の尊み敬ふべき女皇に對しては同じく臣下たる東西の人民の結合を一層堅固に確實に接合せしむる爲めに御助力なさるのと同じ譯なのでございませう。

(完結)



●本誌口繪の解

原壽は米國ワシントン府國會

議事堂内にかゝれる有名の畫家ダブルユー、エツチ、パウエル氏の揮毫になれるもの、十萬弗の巨額を費やして完成せる有名の油繪にして、千八百十三年九月十三日エリー湖上の戰爭に當り、敵艦の巨砲轟々たる響と共に雨下し來る間に立ちて悠々として、既に戰鬥力を失へる旗艦ローレンス號より其軍旗をナイアガラ號に移さんとしつゝある水師提督ペルリの剛勇を書けるものなり。此戰爭は見事ペルリの勝利に歸したるが『吾等は敵に遇